

43.

俳句を作らぬ人でも加賀の千代が詠んだ「朝顔につるべ取られてもらい水」なら聞いたことがあるという。人口に膾炙（かいしゃ）しているからである。

先年千代の前の住んだ松任の寺で見た横物の真蹟（しんせき）は「朝顔やつるべ取られてもらい水」。上五のテニヲハの「に」と「や」が違う。

これは一句の生死に大きく影響する。それを説明しよう。「や」は切れ字なので、朝顔が咲いた、さわやかだよ…と感嘆して小休止の格好。水を汲もうとすると釣瓶が見当たらぬ。誰かのいたずらだと思って近所で貰い水をするという田舎ではよく経験される句となるのである。

「に」の場合では朝顔に釣瓶とられる意味でこのことは自然でない。女の思いやりを誇張するのが主眼で、自然を偽るわけである。悪く言うと娼婦の媚に騙されるのである。

子規が月並を排斥した。月並とは「朝顔に」という俗臭ある句をさしている。

純真に自然を愛する詩情を持たねば良い作品とならない。

44.

人との交流にはまず挨拶をする。一般に季節のことをいう。

俳句においては季語を忘れてはいけいないとしている。季節の挨拶を以って存問する文学である。

挨拶するには相手がある。相手に聞いてもらうことなのである。それ故に相手に明瞭な伝達をすべきであるから、自分だけのメモではない。

ここに二通の葉書を受けた。

一つは「菊花薫るの好季」という常識的な挨拶である。も一つは「庭先の栗落ち止みましたら柿が色づきそめました」と具体的な挨拶である。

前者よりも後者の挨拶は生きている。その人の消息であって借物ではないからである。

45.

スト権が長引きそうな気配で世間は困惑している。予定の行動が取れず取り消しということを書き合わせ私は冬日のあたる家の縁側でこの一文を書くのである。

少し残っている錦木のもみじが日光を透かしている葉のみ鮮紅色に冴えて朱玉さながらに見える。錦木という名をつけられた理由も頷ける。

柿一つ残しておくのを木守柿といって来年の幸を祈るのだが、我が庭の柿はたくさん残っている。手の届かぬ梢だからやむを得ない。二羽の鶉が仲良く熟れた柿を選んで啜りあった。途中ちらっと縁側の私に視線を向けるのが可愛かった。その柿は柘榴のごとく裂けて爛（ただ）れているのだった。

「造花に随ひて四時を友とす。見る處花にあらずといふ事なし……」ふいと頭に浮かぶ古人のことばが柿の甘露みたいに味わえて楽しい。俗事を忘れることだ。